

第17回 山の気象シンポジウム報告

6月23日(土)13時より気象庁第1会議室で山の気象シンポジウムが開かれた。約60名が参加し熱心な討論が行なわれた。

議題と要旨は次のとおり。

1. 雲の穴 気象研 大井正一、山本 勇

昨年8月山本他がモンブラン、マッターホルン登頂の折に著しい雲の穴の写真を撮影した。雲の穴については既に外国文献や天気(2回掲載)にいくつかが紹介されているのでそれらと比較してみた。発生機構はよくわからないがいくつかの説の中で、絹雲の氷晶の尾が下の雲層を蒸散させたためというのが一番もっともらしい。

2. 玉山の気象 気象研 飯田睦次郎

玉山は台湾の旧名新高山(3,997m)のことで、日台間の政治的問題にもかかわらず年間20もの日本のパーティーが登山している。台湾は現在戦時下で気象は秘密となっているのでとくに山の気象については皆目不明である。全体が熱帯性ではあるが高度が高いため夏でも20°C前後である。台風、季節風以外は強風は少いが湿度が高いため濃霧が発生しやすく注意をしないと遭難の危険がある。

今回は中華民国(台湾)の気象局の好意で遭難防止のため玉山のみの資料の提供を受けた。

3. 鳥海山の多年性積雪について 気象研 土屋 巖

鳥海山で越年する積雪は「吹きだまり型」のものが多く、1,300m以高で数か所みられる。1972年の夏は近年においてもっとも融雪が進んだ場合であるが「心字雪雪渓」と呼ばれる万年雪(下限は1,600m)は秋になって前年以前の数年にわたる多年性の構造を現わした。10月初旬の月山、飯豊山の残雪の観察結果との比較を気候変

動の指標としてこの万年雪を説明した。

4. アルプスの雲

環境庁 吉川友章

1970年月上旬スイスのユングフラウ山域とマッターホルン山域を訪れた。天気図を有効につかい天気状態を把握しながら行動した。天気変化が周期的であったためか好天のみをとらえて登山ができた。

5. 八幡平スキーツアーにおける危険性

専修大学付属高校 小岩清水

奥羽脊梁山脈の一部を形成する八幡平は非常に豪雪地域で、これから東北新幹線や東北自動車道が開通すると都会からスキーヤーが安易にツアーを行なうことになる。積雪の状況、性質、地形的な特性をのべ、より慎重にスキーツアーを考えてほしいと説明した。

6. 独立峰周辺の流れの風洞実験

東大宇宙研 恩田善雄、佐藤 浩

東大宇宙研に新設された大気乱流風洞を用いて独立峰周辺の流れを調べた結果、山の背面に対になった渦があることがわかった。この測定結果と富士山での観測や冬季登山者の経験による風系とを比較し実察にかなり適合する結果が得られた。富士山の登山経験者との討論が活発でさらに実験が続けられることが要望された。

7. 森林と環境保全

気象研 三寺光雄

都市が拡張するにつれ人間生存のための環境が急速に悪化してきている。とくに土地の乱開発、汚染大気は緑を少くし、次第に山岳地にも及ぼうとしている。国土の68%をおおう森林が人間生存の環境保全の立場から必要であることを説いた。

(気象衛星課 中村 繁)